# オペラ “トスカ” のアリア

オペラ「トスカ」の生まれた背景について述べますと、時代は 1800 年頃、ナポレオン軍が、破竹の勢いで西ヨーロッパ全域をオーストリア支配から解放し、「自由」が勝ち取られるのですが、その裏で、美人歌手「トスカ」の悲劇の物語が起きるのです。

アルホンス・ミューシャの美人横顔のポスターで有名であったサル・ベルナールが、ヴィクトリアン・サルドゥ作の演劇「LA TOSCA」を 19 世紀末にパリで演じて当たり役になりました。ドイツ連邦共和国統一の 1871 年に先立つ 10 年前の 1861 年に、トリノ王・ビットリオ・エマニュエーレ II 世の下で、貴族や知識人がイタリア統一の運動を起こします。そのトリノの貴族が、この「LA TOSCA」のオペラ化の権利を買い取るのですが、一向に作曲がなされないでいました。

一方、新進気鋭の作曲家のプッチーニは、1889 年、ミラノで、直に、サラ・ベルナール演ずる「トスカ」を観て「オレがオペラにする」と決意をするのですが、プッチーニは“無力”でした。そこで、馴染みのプロデューサーで編集者のリコルディの紹介状を携えてトリノに乗り込んで直談判を行い、見事にオペラに作曲する権利をしとめたのです。紹介状には「貴族たる方が、女だてらに刃物で身分の高い男を殺し、最後に自殺してしまうようなオペラの作曲に加担したのでは、ご先祖様の名折れになりましょう。しかし、この男・プッチーニは、カソリックでは厳禁の“自殺”も、平気で作曲します者で、是非、この男に、オペラへの作曲をお命じください。」と書かれていたようです。

イタリアの統一運動が行われていたとはいえ、まだ、ローマもベネチアも統一に加わっていない時代に、ローマを舞台にして、最後のトスカの自殺を、カソリック寺院のお膝元の「カステロ・サン・タンジェロ（聖天使城）」（映画「ローマの休日」でも有名になった円い城です）の金色の聖天子ミカエルが輝く所に持って来たのです。しかしながら、プッチーニが、意欲満々で作曲した「妙なる調和」、「歌に生き、愛に生き」、「星も光りぬ」は素晴らしく魅力的なアリアです。私も、オペラ「トスカ」と、映画「ローマの休日」を頭に描きながら、サン・タンジェロ城を訪れまして、広場のこの辺で、カヴァラドッシが撃たれたのか・・と想像したり、トスカはこの城壁を飛び越えたのか・・と下を覗き込んだりしたものです。

プッチーニが、そこまで苦労して得た「トスカ」作曲の権利は、1893 年には、トリノの貴族で作曲家のフランケッティのものになってしまったようです。フランケッティは、その翌年の 1894 年に、リコルディやヴェルディと一緒に「トスカ」の作家のサルドゥに会っていました。ヴェルディは、この悲劇作品に大変魅せられていましたが、この作品の結末が変更されない限り、作曲するつもりはなかったようです。でも、ヴェルディ作曲の「トスカ」も聴いてみたいものですね。

プッチーニが携えたリコルディの紹介状のおかげもあり、フランケッティが、「トスカ」のオペラ化は、自分には不可能であると言い出しましたので、再度、プッチーニに作曲が依頼されたのです。一度は、作曲の権利を得ていたプッチーニは、フランケッティに横取りされていたことで、感情を害していまして、すぐには作曲依頼を受けなかったようです。そこで、ヴェルディが仲介に入ってプッチーニを説得し、ようやく、プッチーニは「トスカ」の作曲を受け入れたとのことです。「トスカ」をめぐって、ヴェルディとプッチーニという 2 大イタリア・オペラ作曲家が関係していたとは、オペラ「トスカ」というのは、“タダモノ”ではないようです。

プッチーニは「ラ・ボエーム」の作曲を終えた後の 1896 年から「トスカ」の作曲に取り掛かかりました。作曲開始後、プッチーニは、イッリカやジャコーザという２人の台本作家や編集者リコルディと再三衝突しながら、３年にもわたる困難な共同作業の末、1899 年 10 月に作品が完成します。以上のような、紆余曲折を経たオペラ『トスカ』は、ローマを舞台にした作品であったので、1900 年１月 14 日、ローマのコスタンツィ劇場で初演が行われました。「トスカ」は、前作の「ラ・ボエーム」の趣とは全く異っていたこともあり、批評家の評価は芳しくなかったということですが、聴衆は熱狂的に「トスカ」を受け入れ、初演は完璧な成功であったとのことです。

オペラ「トスカ」の舞台は、ローマ。1800 年 6 月、ナポレオン率いるフランス軍が欧州を席巻していた頃のお話で、全３幕からなります。

第１幕

逃亡した政治犯アンジェロッティが隠れ家を求め、彼の一族が礼拝堂を持つ聖アンドレア・デラ・ヴァレ教会にやって来ます。そこでは、画家のマリオ・カヴァラドッシが、マグダラのマリア像を描いているのですが、礼拝に来る夫人をモデルにしていました。カヴァラドッシはちょっと仕事を休み、ポケットに持っていたメダルに描いてある黒い目に茶色の髪のトスカと、彼が描きつつある肖像の青い目に金髪のモデルとを比較して、アリア『妙なる調和』を歌います。

その後、カヴァラドッシは、物音でアンジェロッティがいることに気づきます。アンジェロッティは、旧知の画家のカヴァラドッシに、ローマ教皇領の牢獄であるサンタンジェロ城から逃げ出してきたことを話します。そこへトスカが外から「マリオ！」と呼ぶので、アンジェロッティを再び礼拝堂に隠します。トスカは、カヴァラドッシとその夜に会う約束をしていたので来たのですが、ドアの外から話し声が聴こえ、カヴァラドッシが落ち着かない様子を見て、嫉妬深いトスカは、カヴァラドッシが、誰か他の女性との密会をしていたと疑いつつも、カヴァラドッシを別荘でのデートに誘い、二重唱『Mario, Mario, Mario! （緑の中の二人の家にいきましょう）』が歌われます。

この二重唱の後、カヴァラドッシが描いた女性の肖像の眼の色を黒くする約束をして、トスカはその場を去ります。アンジェロッティが再び現れ、脱出計画を話し合いますが、アンジェロッティの逃亡が発覚してしまい、アンジェロッティは急いで逃げ、カヴァラドッシも同行します。しばらくすると、警視総監スカルピアがアンジェロッティを探しにやってきます。残忍なスカルピアは、教会内でアンジェロッティの形跡を見つけ、「カヴァラドッシが脱獄囚のアンジェロッティの逃亡に関係している」と疑い出します。そこにトスカが現れます。カヴァラドッシが教会からいなくなっていることから、トスカは彼の浮気を疑い出し、トスカは怒って教会から出ていきますが、スカルピアは、部下のスポレッタにトスカを尾行させます。

第２幕

スカルピアのもとにスポレッタが帰ってきます。そして、「アンジェロッティは逃したが、カヴァラドッシを捕えた」と伝えます。カヴァラドッシは厳しい拷問を受けますが、「何も知らない」と言い続けます。しかし、トスカが恋人の拷問に耐えきれなくなり、「庭の井戸の中にアンジェロッティがいる」と告白してしまいます。拷問から解放されたカヴァラドッシは、トスカが居場所を教えたことに怒ります。しかし、その時、マレンゴの戦いで、スカルピアの所属する軍が、ナポレオン軍に敗北した知らせが舞い込み、カヴァラドッシが勝利を叫ぶと、カヴァラドッシに死刑が宣告され、

収監されてしまいます。

残されたトスカは、スカルピアに、カヴァラドッシを助けてくれるように頼みます。スカルピアは、カヴァラドッシを自由にする代償として彼女の身体を求めます。トスカは絶望し、何故このような過酷な運命を与えたのか、と神に助けを求めて祈るアリア『歌に生き、愛に生き』を歌います。このアリアは『歌に生き、恋に生き』と訳されることもありますが、トスカは「私は歌に生き、神への amore に生きてきたのです」と歌いますので、ここでの“amore”は「愛」と訳すのが妥当だと言えます。“amore”を「恋」と訳すと「神への『恋』に生きる」になり、妙なことになります。

スポレッタが戻ってきてアンジェロッティが自殺したことを告げ、カヴァラドッシの処遇をたずねます。スカルピアはスポレッタに「銃殺のふりだけして、カヴァラドッシを生かすよう」命令しますが、本当はそうではなく、「カヴァラドッシを銃殺する」ように命令しているのです。トスカは「2人で逃亡するための通行手形」を要求します。スカルピアが手形を書き終えトスカを抱こうとしたときに、トスカがスカルピアをナイフで刺し殺してしまいます。トスカは息絶えたスカルピアから通行手形をもぎ取り、部屋を出ていきます。

**第３幕**

最後の「第３幕」の舞台は、サンタンジェロ城の屋上にある牢屋と処刑場です。カヴァラドッシが収監されています。カヴァラドッシは看守にトスカへの指輪を託し、さらに手紙を書きだします。そして手紙の途中で感極まり、自らの死と恋人との別れを想い、「今ほど命を惜しいと思ったことはない！」と、有名なアリア『星も光りぬ』を歌います。

ところで、オペラの筋からは外れますが、この『星も光りぬ』に関する「笑い話」を一つ。
私の本職は医師ですが、これまで、数々の舞台上では、プロ意識を持って歌って来ました。高名な音楽プロデューサーの中野雄（なかの たけし）先生が、2019 年の「モーストリー・クラシック 8月号」の「音楽 人間模様 天は二物を与える」という記事で、札幌の医師でピアニストの上杉春雄先生と、私・米澤のことを、 “医師で音楽を趣味にする人は多いが、このお 2 人は音楽もプロ ---- いわゆる「プロ級」ではない。”とお書きくださっています。確かに、私は、日本クラシック音楽コンクールで、声楽部門第１位に加えて、全ての部門でのグランプリを獲得、カンツォーネの全国コンクールでも優勝し、サントリーホール、オーチャードホール、東京芸術劇場、紀尾井ホール等の一流コンサートホールで、超一流の指揮者や歌手と数多くの共演を重ね、日本人歌手のみでなく、ニコラ・マルティヌッチやジュゼッペ・ジャコミーニといった世界的テノール歌手とのジョイントリサイタルでも歌い、ニューヨークから来た音楽記者が、「Yonezawa が歌った「清きアイーダ」の最後の高音の「Hi - b」は、メトロポリタン歌劇場でも聴いたことのない、素晴しいものであった」と、世界中に発信してくださいました。イタリアと日本の双方で、「トゥーランドット」全幕のカラフ王子を演じたのを始め、海外でも、イタリア、アメリカ、イギリス、韓国、ルーマニア等での、沢山のコンサートで歌い、客席総立ちのスタンディングオベーションを頂いて来ました。

そのように、舞台に上がった時には、医師から、「プロ歌手」に変身して歌って来ましたが、本格的に音楽教育を受けた訳ではないので、時々、“当て外れ”のことを考えたり言ったりします。テノールのオペラアリアの中で、最も有名であり、これまで、度々、人前で歌って来た『星も光りぬ』ですが、最近、この『星も光りぬ』のレッスンを、松本美和子先生に受けました時、「“E lucevan le stelle” に始まる前半部分は、後半部分の声を張り上げて歌う部分に比べると、同じ音程で、ただ

ただ呟くだけで、なんだか余分な物がくっ付いているようで、退屈ですよね」と、つい本音を言ってしまいましたところ、松本先生曰く「米澤さん、何を言ってるの？！この、レチタティーヴォの部分がいいんじゃないの！ もう一度、言葉の意味を良く考えて、その言葉が表す情景を思い浮かべて、歌ってごらんなさい」と言われ、辞書を引き直しながら、対訳を見直し、「へえ～ッ、そうなんだ」と改めて勉強をし直した次第です。

同じようなことは、藤沢での「トゥーランドット」で、カラフ王子を演じた時にもありました。カラフ王子役のお話しを頂いてから、私は、まずは、全幕分の歌詞とメロディを丸覚えしました。イタリア語の歌詞も、歌の節が付いていると、意味は分からなくても、意外と覚えられるのです。全ての歌詞とメロディを丸覚えしてしまってから、対訳を見て、大体の意味を勉強して、舞台稽古に参加していました。いよいよ本番が近くなり、舞台装置も完成しての最終リハーサルで、舞台の上に映し出される歌詞の和訳を見て、「へえ～ッ、ここはそういう意味だったんだ」と改めて認識した場面も多く、「これで良く主役を務めているな」と自分に呆れたり、その図太さに感心したりしたものでした。

さて、オペラ「トスカ」の続きに戻ります。カヴァラドッシが『星も光りぬ』を歌い、泣き崩れたところに、トスカが現れます。トスカはカヴァラドッシに通行手形をみせ、これまでの出来事を伝え、スカルピアを殺したことも告白します。トスカは「見せかけの処刑があるから、撃たれたら倒れるように」カヴァラドッシに言い含めます。二人は自由を喜びます。処刑の準備が整い、カヴァラドッシは処刑台へと進みます。そして銃声が聞こえると、トスカは倒れたカヴァラドッシのもとへと向かいます。しかし銃声は空砲ではなく、カヴァラドッシは既に死んでいました。「空砲で見せかけの処刑」は嘘だったのです。その時「スカルピアが殺害された！犯人はトスカだ！」という知らせが入ります。絶望したトスカは城壁から身を投げて命を絶ちます。

以上が、オペラ「トスカ」の概要ですが、ちょっと横道に入って、“余分なおまけ”を・・・。
第２幕で、「マレンゴの戦いで、スカルピアの所属する軍が、ナポレオン軍に敗北した知らせが舞い込み、カヴァラドッシが勝利を叫ぶ」という場面がありますは、その「マレンゴの戦い」で、ナポレオン軍が、「午前中は敗け、午後から勝った」ことの真の原因は、昼飯の「鶏とザリガニのごった煮」だったのです。「こんな美味いものをこの辺りの農民はいつも食べているのか！？これを、皆にも喰わせよう！」と、ナポレオンは大はりきりで、兵隊全員に昼飯として「鶏とザリガニのごった煮」を食べさせ、それで元気を得た兵隊達の団結力で午後からの戦いに勝ったとのことです。

（2021 年 10 月 11 日 記）